

われる死者が優位に立つといえる。

円仏教の薦度斎と巫俗儀礼、儒教祭祀との違いとして次ぎに指摘できることは、儀礼に参加する人々の様相である。儒教祭祀は男性中心で行われ、男性の父系親族に重点をおいた儀礼である。一方巫俗儀礼では嫁、姑、小姑、相嫁、それに友人などの女性たちによる協力が指摘されている。父系親族と女性たちのあつまりという性格の違いはあるが、どちらの儀礼にも「集団」との関わりが指摘できる。それに対して円仏教の薦度斎は、例えば女性信徒に対して、夫の家族と一緒に家でも祭祀を行い、またそれとは別に一人で円仏教の施設に来て祭祀を行うことを勧める場合があるように、個人でも実施が可能とされる。

このように円仏教の薦度斎は韓国の人々に、死者よりも生者が優位に立ち、また個人でも実施が可能な儀礼を提供していると解釈できる。近年の韓国社会の様々な面での変化に伴い、儒教祭祀でも女性が実家の父母のために祭祀を行ったり、巫俗儀礼でも関係者数人だけが参加する小規模な儀礼が増えたりしているようである。また女性が実家の父母を仏教寺院で祀る場合も多くなっているという。このような状況を見ると、従来のように父系や夫系のつながり、または女性同士のつながりを通じて死者への儀礼を行うのではなく、身近な死者を個人的に祀るという傾向が広まっているようである。そうであれば個人でも実施が可能な円仏教の薦度斎には、現代韓国社会において身近な死者を個人的に祀ることが可能な儀礼として展開できる可能性があると思われる。

日本民間神楽の「白い布」

三村 泰 臣

一、問題提起 神楽は「神座の前の神あそび」と定義され、神を招き・遊び・送る鎮魂の歌舞と考えられてきた。この鎮魂を五来重はタマフリとタマシズメの二面をとらえ、従前の定義はタマフリで、日本民間神楽の本義はタマシズメにあるとした。ところで日本民間神楽で目にする「白い布」はとりわけ中国地方の荒神神楽祭祀の中によく残っており、古代から中世の神楽祭祀の跡を止めている。この白い布を追究すれば、複雑な荒神の霊格や荒神神楽祭祀の意図を解明できるだけでなく、五来説を確認し日本民間神楽祭祀の定義や研究の方向性を提示することが可能になる。

二、中国地方の荒神神楽祭祀で使われる「白い布」【事例一】「比婆荒神神楽」（広島県）。白い布に荒神を包んで迎え、棚に安置し白い布を張りめぐらす。祭主たちは白い布を肩にかけて互いにつながり土公神遊び（庄原市西城町平子）や荒神遊び（東城町栗田）をおこなう。荒神舞納めで藁蛇にのせた白い布を神柱がとって狂い舞って神がかかる。その白い布は荒神祠に埋められる。【事例二】「備後神楽」（広島県）。舞場に白い布をクロス状に張りわたし、その下を三名の舞手が潜りながら舞い神がかりする（世羅郡世羅町小国）。【事例三】「周防神舞」（山口県）。白い布に荒神をくるんで迎え、天井から引いた三本の

第15部会

白い布を舞手がつかみ登り降りする(周南市大字夏切)。その布を持って舞うところもある(防府市旦)。**【事例四】**「川名津神楽」(愛媛県)。柱松のてっぺんに白い布をかけ、ダイバ(鬼)がその柱松に登って藁人形と白い布を落として燃やす(八幡浜市川上町川名津)。ほかに、備中荒神神楽(岡山県)の布舞、大元神楽(島根県)の御綱祭、山代神楽(山口県)の山之神、周防神舞(山口県)の芝鬼神などで白い布が使われる。これらの事例から、白い布は荒神神楽祭祀でのみ使われる、荒神を迎え・遊び・送るとき使われる、神がかりと深く連動していることがわかる。しかし白い布がどんな神霊と関わり、何故神がかりと連動しているかは不明である。それを解く手掛かりは中国と韓国の民間祭祀の中にあると思う。

三、中韓の民間祭祀で使われる「白い布」**【事例一】**韓国の民間祭祀で白い布が頻繁に使用されている。その由来は死霊祭祀(チノギクツ、シツキムクツ、オグクツ)にある。白い布を裂いたり(裂布)、結び目を解いたり(コプリ)する。**【事例二】**中国長江中流域の死霊祭祀で白い布が使われている。「除霊」(苗族)や「打繞棺」(土家族)では祭場正面に白い布を張り、頭に白い布をかむった遺族たちが霊屋や棺桶のまわりで順逆の歌舞を繰り返す。「道場」(土家族)では祖霊迎えの迎真、死霊迎えの地獄破り、死霊清めの目連斎で白い布が使われる。変死霊を対象にするときは赤い布を使う。尚、榆林窟(甘肅省安西県)第二十五窟南壁の浄土図「観無量寿経変図」(中唐期作)に阿弥陀仏から諸菩薩へ伸びる白い布が描かれている。敦煌莫高窟にこの白い布は描かれていないので、白い布は東アジ

ア共通の伝統として唐代以前から死霊祭祀に使用されていたと考えられる。

四、まとめ 中韓の事例から白い布はもっぱら死霊祭祀で使われ、死霊や祖霊を迎えたり、清めたり、送ったりするとき使われている。このことから白い布を使う荒神神楽祭祀も死霊祭祀に由来し、荒神の霊格は死霊や祖霊であると考えられる。また神がかりはこの死霊や祖霊を迎えたり送ったりするさい発生する。したがって日本民間神楽はタマシズメとタマフリの両要素が複合していると考えたほうがよい。

薪能の興行形式にみる宗教性

永原 順子

そもそも薪能(新猿楽)は、九世紀頃、大和春日大社の神事もしくは、興福寺の修二会の薪宴(たぎのえん)Ⅱ修二会に使う薪を迎える儀式に始まるといわれる。

一方、戦後からはじまり、いまや全国に広がっている「薪能」はかなりイベント性の高いものとなっている。中には、能そのものを社寺に奉納する形をとるものもあるが、その興行形式は多種多様である。

先行する研究はあまり多くない。あっても能評やイベントの状況報告、薪能の歴史、などに集中しており、包括的なものが見られない。数が多かったり、不定期なものがあつたりと、全